

特集

続 小さな命を守るため

私たちにできること

今号は、続 小さな命を守るために「私たちができること」の特集です。保健所から犬猫を引き取る方も増えてきて、幸せになった犬猫たちの様子を見聞きする一方で、相変わらずゴミのように捨てられる犬猫たちも後を絶ちません。一人一人の意識が変わらなければ、いつまで経っても現状は変わりません。命を守ること・・・私たちは、小さな命にどう接していくべきかもっと真剣に考えるべきではないでしょうか。

収容犬猫たちを見てみると

札幌市動物管理センター（以下センター）や保健所のHPでは、毎日のように保護された犬猫の情報がアップされています。センターには一時期ブームになったミニチュアダックスが必ずと言っていいほど収容されていますし、そのあと続いた流行犬種のチワワ、ブードルなどの放棄も目立ちようになりました。流行犬種が生まれるのは日本独特の文化のようですが、流行り廃りで買い替える家電製品や洋服とは違い、動物は豊かな感情を持っている「命あるもの」です。犬猫を終生にわたり面倒を見るのは飼い主として当然のことですし、飼う前に動物の寿命が尽きる先迄、ある程度人生を予測する必要があります。飼った（買った）時は可愛がり、家族みんなで世話をしていたのに、一年後には外に繋がればなしの犬や、飼い猫に不妊手術

をしていないために、発情がくるたびに子猫が生まれ、川に流す、山に捨てる、保健所に連れて行くなど、簡単に捨てる心無い飼い主も多くいます。センターや保健所に持ち込まれる猫はあまりに多く、一方、譲渡を希望する人は限られているため、猫の殺処分数は犬の3倍にもおよびます。また、猫の譲渡をまったく行っていない保健所もあり、収容された猫のほとんどが、再び生きるチャンスも与えられず、人知れず闇に葬られています。こういった現状からも、飼い猫に不妊・去勢手術を施し、捨てられる子猫を減らさなくては、猫の殺処分問題は解決しません。犬も猫も人に依存しなければ生きていけない動物です。私たち人間が適正に管理、飼養しなければ、殺処分の問題は一向に解決しないのではないのでしょうか。

後を絶たない苦情や相談

しっぽの会に寄せられる犬猫の苦情や相談の多くは、『飼い主が高齢で施設に入所する・病気になって面倒が看れない・経済的に苦しく飼えなくなった・家族がアレルギーになった』等、どれも人間側の事情によるものです。ペットフード協会の平成22年度全国犬猫飼育実態調査によると、国民の約3分の1が動物を飼養しており、また、近年の少子高齢化等を背景に、家庭動物の飼育意向が強まっています。このような状

況から、国、地方公共団体等は適正飼養を推進するための様々な取り組みを行っていますが、依然として遺棄・虐待等の問題が後を絶ちません。人間側の都合で安易に動物を捨てることはせず、動物連れて入居できる住宅を探したり、日頃から不測の事態に備えたり、動物の立場にもなって欲しいものです。捨てられた犬猫の行く末は、『動物を嫌う人に虐待される、行政殺処分、餓死や衰弱死、凍死、交通事故、実験動物にさ

れる、猫は三味線の皮にされる』など、そのほとんどが悲惨な最期を迎えます。飼い主は動物に対する愛情と責任はもちろん、社会に対する責任も伴います。人

生にはさまざまな出来事がありますが、『最期まで飼う自信がない』など、先々、困難が予想される人は、飼わないという選択も動物への愛情です。

飼い主にできること

平成22年度、札幌市や北海道内の保健所に収容された犬のうち、飼い主のもとに帰ることが出来た犬は札幌市で約5割、北海道では約3割。猫については7,283匹のうち、飼い主のもとに帰ることが出来たのはたったの36匹でした。返還率が上がらないのは、「近いうちに帰ってくるだろう。」とか、「どこかで幸せに暮らしているだろう。」と言った飼い主の意識レベルに変化が見られないためではないでしょうか。楽観的な考え方は犬猫たちを不幸にするだけです。飼い主がモラルを守って飼っていれば、殺処分される犬猫は大幅に減少するのです。以下、殺処分される犬猫を減らすために、飼い主ができることを書いてみました。

■犬は必ず登録し、鑑札・迷子札をつけ、猫も迷子札をつける。マイクロチップは体内に挿入するため、外れることがなく有効。

■猫は絶対に戸外に放さない。放し飼いは危険だらけ！

■犬猫が行方不明になったら、すぐに保健所や警察に届け出る。保健所に捕獲・収容された場合、飼い主や新たな引き取り手が現れなければ殺処分になる。

■飼養後早期に飼い犬・飼い猫に避妊・去勢手術を！全国の保健所には毎日のように多くの子犬や子猫が持ち込まれ、新たな引き取り手がない場合は殺処分されている。行き場のない不幸な命を産み出さない。

■ペットが天寿を全うする最期まで責任を持って飼うことが出来るか将来のことも考え、自信がないなら最初から犬猫を飼わないのも愛情。

■これから犬や猫と暮らし始めるのなら、保健所や動物愛護団体などに収容されている犬猫を引き取り、不幸な命を1匹でも救う。

■悪質なペットビジネス、身勝手な飼い主に捨てられた犬猫たち、虐待された犬猫たちの現状や、命の尊さなどのメッセージを周囲に伝える。

相手の立場になることの大切さ

飼育を放棄された犬猫や路上で行き場を失い弱っている野良猫たち。小さな命が懸命に生きようとしているのに、悲惨な現状に胸が潰される思いをされた方は多いと思います。センターや保健所には目も開いていないような子猫が段ボールや紙袋に入れられ、まるでゴミのように持ち込まれています。また、野良猫は虐待の対象となることが多く、日本でも猫の肢を切断した、まぶたを接着剤ではりつけた、矢で射ったなど、マスコミでも報道されましたし、冬に水をかけて凍死させる、石をぶつける、蹴り上げ怪我を負わせるなど、猫への虐待は挙げだすと切りがありません。どうしてこんなに猫が憎いのでしょうか。昔は車も少なく、猫が自由に外を往来していてもさほど気に留めることもなく、猫がいるのが日常の光景でした。しかし、昨今のガーデニング人気や極端な衛生意識から、野良猫は邪魔者扱いされています。でも、自分の立場になって想像してみてください。「もし、自分がこの子だったらどうだろう。」と。何日もごはんを食べることが出来ず、やっと探し当てた餌も、散らかすからと追い払われる。夏の暑い日照りの中、水もなく、身体を休める場所もなく、暑さで体力は消耗していく。冬は寒さに凍え凍傷になり、冬場はさらに餌もなく、

身体は低体温になり衰弱が激しくなって、車庫や庭先にいると追い払われ、休むことさえ許されない。公園に行っても、心無い人の虐待に合う・・・最近、札幌市内で頭部を切断された猫の死体が発見され、人間にも害が及ぶ可能性や、悪質な「動物愛護法」違反の疑いで警察が捜査に乗り出しました。また、敷地内で犬を放し飼いにし、不妊手術をしていないため、毎年生まれてくる子犬を川に流して殺している飼い主がいるとか、悲惨な話を耳にしています。動物愛護管理法には、「動物は命ある存在であることや、人と動物が共生できるよう配慮しなければならない。」と書かれています。法律は、人間と動物が共に生きる社会、生命にやさしい社会を作っていくことを、私たち国民に求めているのですが、実際は虐待され、命を傷つけられている動物達がたくさんいます。人は誰でも一度や二度は親切にされたお陰で、助かったことや感謝したことはあるはず。目の前に必死で生きている犬猫たちに、「負けずに精一杯生きて！」と相手の立場になって、温かい心で接して欲しいものです。また、野良猫に餌を与えるだけでなく、不妊手術を施し不幸な命を増やさないことが、将来死んでいく命を生み出さないことに繋がるのではないのでしょうか。